

悲劇の宍戸藩主 松平頼徳

那珂市歴史民俗資料館



宍戸藩の祈願所であった養福寺に「元治甲子之變殉難碑」がある。宍戸藩校脩徳館師範川口翊宸（助九郎）の撰文・書になる明治5年（1872）3月建立の碑である。題額「精忠大節」には、第9代宍戸藩主松平頼徳とその家臣たちの忠義に対する子孫たちの無限の敬意が込められている。

那珂市額田氏の最後の城主小野崎昭通の妻は宍戸安芸守四郎義利の娘（法名妙満）である。昭通は佐竹氏に敗れて一時伊達政宗の保護を受けた後、水戸徳川家に仕え額田姓を名乗った。歿後は夫妻とも那珂市本米崎の上宮寺に埋葬されたが、その後水戸光圀が水戸藩士のために設けた水戸市酒門の共有墓地に改葬された。

佐竹氏の配下にあった宍戸氏は、豊臣秀吉の小田原城攻めや太閤検地の後真壁郡海老ヶ島に移り、やがて関ヶ原合戦の後佐竹氏と共に秋田・その外へ移った。宍戸には秋田から秋田実季が入封した。秋田氏が三春へ転封の後、宍戸は幕府の直轄領・旗本領となっていたが、水戸藩2代藩主徳川光圀は弟たちに領地を与え独立させた。額田（後に磐城守山）・石岡・宍戸がそれであり、この宍戸には光圀の弟で頼房の7男頼雄が1万石の宍戸藩主として据えられた。藩主は定府制のため常に江戸に在住し、宍戸にはやがて陣屋が置かれて領民の統治に当たった。

後年、幕末期の日本は開国・攘夷をめぐる混迷していた。特に水戸藩では、攘夷を叫んで筑波山に旗揚げした藤田小四郎ら天狗派筑波勢と、その行動を阻止しようとした家老市川三左衛門ら門閥派・諸生勢とが激しく対立した。朝廷をはじめとする強硬な「攘夷」は果たして可能であったのか、攘夷の中味は単に排外であったのか、自主独立保守であったのか、攘夷の先の明確な目標は何であったのかも問われるところである。

この水戸藩内の騒乱を鎮圧する責任者であった藩主慶篤は、将軍留守の江戸を預かる立場から動けず、名代として支藩で江戸在住の宍戸藩主松平頼徳に委ねるべくその許可を幕府に求めた。許可を得て水戸へ下った頼徳一行を、市川三左衛門らはその入城を拒んだ。反対派の武田耕雲齋一行が合流している故をもってである。しかし、これは藩主および幕府への叛逆である。藩命を遂行するため、頼徳は、一旦は物資集散の地湊へ引き、事態の打開に種々奔走した。その誠意も叶わず、また幕府も追討軍を發したことにより「賊徒」扱いとなり、遂に切腹の命を受けたのである。文中に「幽囚斬戮（ごんりく）の惨、我が宍戸の先侯（頼徳公）の事より甚だしきはなし」と断じられた通りであり、頼徳に非はなく、まさに悲劇の藩主であった。

本館には、頼徳公使用の正八角金色葵紋入りカバー付「衣装箱」が収蔵されている（個人寄託）。頼徳公の最期に当たって、水戸家の菩提寺でもあった瓜連常福寺の69世安西順問上人が、せめてなにがしかの遺品をと懇望して拝領したものであるという。

